

金融研究会

「貨幣学（Numismatics）の方向を探る」の模様

I. 会議の概要

1. はじめに
2. 討議の模様

1. はじめに

金融研究所では昨年12月5日、「貨幣学（Numismatics）の方向を探る」をテーマとして、経済史、考古学、経済理論や古文書研究などの専門家を招いて金融研究会を開催した（参加者については付、参加者リストを参照）。

今回の金融研究会は、故田中啓文氏から譲り受けた「錢幣館コレクション」を基礎として1985年11月に開設された貨幣博物館が10周年を迎えるにあたり、これまでの研究成果を踏まえつつ今後、貨幣研究を推進していくに際しての方向観や研究テーマのあり方等について幅広く議論することを目的としていた。

金融研究会はパネルディスカッション形式で行われ、金融研究所大久保研究第3課長による導入報告の後、これに対する6名のパネリストによる基調報告を兼ねたコメントならびにラウンドテーブル参加の学者を交えた一般討議において、今後の貨幣研究のあり方をめぐって活発な議論が展開されたが、その主要なポイントを整理すると次のとおり（以下、文責金融研究所）。

- ① 貨幣研究は現在、単なる古銭類の収集・分類・整理にとどまらず、貨幣を取り巻く社会経済環境や文化的背景などを考慮のうえ幅広い観点から実施されているが、今後ともそうした方向で研究を推進し、貨幣の流通実態を多面的に検討・分析していく必要がある。
- ② 遺跡から出土する古銭の推定埋没年代およびその分布状況からえられる情報は、貨幣の流通実態を検討するうえでもきわめて貴重な資料であり、今後、貨幣学と考古学との協業の重要性が増大している。また、貨幣の鑄造に関わる諸仮説の妥当性の検証に際しても、貨幣の構造・材質に関する理化学的手法（例えば非破壊分析）という新たな観点からの分析が利用可能となってきた。
- ③ 江戸時代における藩札を中心として地域レベルでの貨幣研究についてはその地域ごとの蓄積が多数あるが、これらの研究成果を全国レベルあるいはマクロ的な観点か

ら取りまとめることが必要である。

- ④ 江戸時代の幣制に関するこれまでの研究においては、多くの場合、金・銀・銭貨からなる三貨制度を前提としたうえで「貨幣の鑄造」に焦点が当てられているが、江戸・大坂・京都などの幕府直轄地以外では主として藩札が貨幣として流通していた。このように三貨と藩札からなる二重構造の幣制がなぜ江戸時代に形成・展開されたのかという点についての統一的な把握が求められている。このほか、江戸時代は高度に発達した信用経済社会でもあったため、両替商を中心とした信用制度のあり方や、商人の手元に保蔵された資金の市中還流策としての「御用金」制度の再検討なども重要な研究テーマである。
- ⑤ わが国の貨幣制度は、和同開珎以来、東アジア交易圏のなかで中国の影響を強く受けつつ発展してきているため、とりわけ江戸時代の幣制を研究するに際しては、東アジア交易圏との関わりに留意しつつ検討・分析することが重要である。
- ⑥ 貨幣の研究は貨幣が社会生活の中に深く関わっている存在であるが故に経済史、経済理論という観点のみならず多面的な分析が必要であると同時にそうした各分野における研究成果の相互交流が不可欠である。また分析する場合の時代区分についても古代、中世、近世といった時代で区切ってしまうのではなく歴史的な継続性を重要視すべきである。

2. 討議の模様

(1) 大久保研究第3課長による導入報告

大久保は、今回の導入報告のうち、今後の貨幣研究のありうべき方向について論点を整理。貨幣研究のアプローチを

- ①貨幣の収集、分類、整理
- ②貨幣の法制史的研究
- ③貨幣の動態史あるいは生活史的分析
- ④出土銭の分析
- ⑤貨幣史の経済理論的分析
- ⑥理化学的分析

の6つに分類、整理するとともに、一般民衆による日常決済手段としての貨幣についての流通・文化史的な観点からの分析の重要性を指摘した後、金融研究所として今後取り組んでいくことを考えている次の3つのテーマについて説明を行った。

イ. 貨幣の素材分析

貨幣が貨幣として利用される頻度が高まるにつれ、貨幣素材の磨耗や損傷を避けるこ

I. 会議の概要

とができないため、現存している貨幣の損耗状況を科学的に分析することにより、その流通実態を推し量ることができると考えられる。また、遺跡から出土した古銭も貨幣の流通実態についての貴重な情報を提供すると考えられるほか、非破壊分析といった理化学的手法を用いることにより、藩札の製造過程や偽造対策などについても、新たな観点からの検討が行いうる。

ロ. 江戸時代における貨幣制度のあり方と機能に関する研究

金・銀・銭貨の鑄造に関しては、これまでに多数の学問的蓄積があるが、その一方で、それらが日常の決済手段としてどのように機能していたかという点に関しては、さほど明らかになっていない。小額貨幣として頻繁に利用されていた銭貨の意義、役割と機能についての再検討や、藩札・銀目手形といった信用貨幣をも含めた江戸時代の貨幣・信用制度の機能について現代的な観点から検討することも一考に値する。

ハ. 貨幣史のマクロ経済学的な観点からの研究

近世における日本経済の発展を正確に理解するためにも、江戸時代における貨幣供給と、財政バランス、物価変動および景気変動についての統計的分析など、マクロ的な経済変数相互間の関係を分析する必要がある。

(2) パネリストおよびラウンドテーブル参加者からのコメント等

導入報告に対し6名のパネリストがコメントを兼ねた基調報告を行い、その後ラウンドテーブル参加者を含めた一般討議に移ったが、そこで出された意見を内容的に分類してみるとおよそ以下のとおり。

(貨幣制度に関する意見、コメント)

貨幣制度に関しては貨幣制度が確立した江戸期の分析についてのコメントが大宗を占めた。まず金・銀・銭という三貨の流通に関してはそれが江戸、大坂という地域的特徴をもっていた点に加え、社会的な階層により使用された貨幣種が異なる点も考慮する必要性が指摘されたほか、こうした三貨制度と為替、藩札といった信用通貨が併存したことの背景についての分析も重要との指摘がなされた。さらにこうした通貨の発行、管理のメカニズムに関し、中央銀行が存在しない中でどのような仕組みが働いていたのかが興味深いポイントとして挙げられた。

また、江戸期の金融制度については両替商の働き、あるいは幕府御用金が果たしていた役割について掘り下げた分析が必要とのコメントが出されたほか、明治維新後の為替会社の機能と江戸期システムからの歴史的な繋りについても検討を加えるべきとの指摘がなされた。

(国際的な視点に関する意見、コメント)

貨幣史の研究については古代、中世に関しては中国、朝鮮といった海外との繋りが常に問題となるのに対し、貨幣制度の確立した江戸時代の分析になると、同時期日本が鎖国状態にあったこともあって、国内的な制度分析に終始する傾向があるが、現実には江戸時代の貨幣を考える上では、アジア経済圏の中で日本を位置づけて考えることが必要と思われる、との指摘が数名からなされた。

また、貨幣制度、信用制度、銀行制度等を研究する上で重要な「貨幣の節約」という観点を分析する際にはそれらのシステムを支えたと思われる、例えば両替商の機能について国際的な比較を交えた観点が不可欠だとの意見も出された。

(考古学ないし理化学的視点に関する意見、コメント)

貨幣史は、考古学や理化学の成果を生かして充実・発展させることが今後一層望まれるが、わが国においては考古学と「Numismatics」との学問的交流が海外におけるほど密接ではなかったという指摘がなされた。最近の古代・中世遺跡から出土する貨幣が提供する情報を組み入れ、整理する試みが開始されているとも紹介された。また、従来は「泉貨学」的視点から行われていた貨幣の分類調査に、近年非破壊分析手法の発展により、貨幣分析のツールとして機能するようになった理化学的アプローチを加味して、例えば硬貨や藩札等の分析調査が進められるべき方向性が示された。

(マクロ経済的分析に関する意見、コメント)

一部からは、数量経済史的なアプローチを江戸期の経済分析に応用する試みが紹介された。経済理論的手法を使った分析のネックは絶対的なデータ不足であり、例えば実体経済を分析するにも中期的な物価のデータに依存せざるをえない現状について述べる向きがあった。今後この方面での研究を進展させていくには、貨幣の需要・供給・流通・相場や、実体経済関連のデータの発掘・整理が何よりも肝要であり、その分析を通じて「鑄造史としての貨幣史」から「動態史、生活史としての貨幣史」への研究の進展が期待されとの展望が示された。

(その他)

わが国貨幣経済社会の開始は江戸時代に始まるという指摘があったことにより、従来から議論されてきている江戸期と近代との隔絶性・連続性の問題に加え、江戸期とそれ以前の中世期との隔絶性の存在の可能性も示唆された。

また、貨幣博物館の資料展示方法については、研究者の立場として、農家や両替商のセットを設置し、貨幣授受のデモンストレーションを行うべきではないかといった展観上の提唱もなされた。

I. 会議の概要

パネリスト、ラウンドテーブル参加者の具体的な意見・コメントは次のとおり。

イ. パネリストによるコメントを兼ねた基調報告

速水 融（国際日本文化研究センター名誉教授、経済史専攻）は冒頭、貨幣は一般民衆が日常的な決済手段として利用しているという実態に着目のうえ、貨幣の意義や役割を議論すべきという金融研究所からの提案に対し全面的に賛同を示した後、次のような報告を行った。

「わが国では17世紀に入って、全国でかつ経済主体の各層において貨幣が使用されるようになったという意味で、貨幣経済が成立したといえよう。江戸時代は、わが国における初めての本格的な貨幣経済社会であるという点で画期的な時代なのである。これを例証するものとして、土地取引の代金支払いや明石海峡・兵庫の関所での通行税支払いのほとんどすべてが銭によって行われていたという事実を挙げることができる。江戸時代は、人々が日常生活で貨幣を需要し、それに対して幕府ないし藩が貨幣を供給するという制度が実際に機能した時期でもあり、貨幣への需要と供給がともに揃ったという点でわが国貨幣史上大きな意義がある。

江戸時代はまた、金・銀・銭貨からなる三貨制が徳川幕府により採用される一方、領国貨幣である藩札が併存していたが、三貨が全国均等に流通していたかのように考えるのは大きな問題であるといわざるをえない。『江戸の金遣い』、『関西の銀遣い』というように、経済圏を分けて金・銀貨の流通状況を捉える見方が従来から支配的であるほか、最近では岩橋のように『銭遣い』経済圏も別途存在するのではないかと提唱する論者もある。一方、奉公人による賃金受取形態についての実態調査結果では、年間の賃金総額は金貨で計算されているものの、奉公人に対しては銭で支払われていることが明らかにされている。このことは、金貨・銭貨の使用状況については地域圏のほか社会層にも配慮のうえ捉える必要があることを示唆している。

このほか、江戸時代においては貨幣は幕府や地方政府により供給されており、現代的な意味での中央銀行は存在していなかった。そうしたなかで、貨幣がなぜ支払手段として有効に機能しえたのかというのも興味深い研究テーマであるといえよう。この点については、私自身、登記簿がないなかで土地の売買がしっかりと行われていたことが示唆しているように、社会全体としての信頼関係のなせる業ではないのかと考えている。

貨幣が民衆の間で実際にどのように使われていたかに関する研究も重要である。貨幣博物館の展示においても、単に貨幣を陳列するのではなく、両替商や農家といった場を設定し、どのような貨幣が誰と誰の間で用いられていたかを具体的に示す工夫があってもよいのではないか。」

次いで岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授、考古学専攻）からは考古学および理化学的アプローチという2つの異なった観点から貨幣研究のあり方に対し以下のような提

案があった。

「考古学においては、古くより「Numismaticsは考古学の一分野」と考えられており、現に古代ギリシア・ローマの考古学的研究において numismatics は重要な位置を占めている。わが国では従来、両者は異なった研究分野に属するものと理解されることが多かったが、近年、古代・中世の遺跡から古銭関係の出土品が増加している。これらの資料を貨幣史の観点から整理し直し、そうした情報に基づき貨幣の流通実態を探ることは、貨幣史研究上も有効ではないかと思われる。

どの遺跡からどの種類の貨幣がどれ位の量出土したかを統計的手法に基づき整理し直すと、その当時における貨幣の流通実態も自ずと明らかになるとともに、通説の妥当性を検証することにもつながると考えられる。例えば和同開珎¹⁾に関していうと、新和同銭は広範な地域から出土している一方、古和同銭は平城京以外からは出土していない。このことは、古和同銭が貨幣として流通していなかった可能性を示唆しているが、それはまた従来からの仮説が出土銭により確認されたものと考えられる。皇朝十二銭のうち発行枚数が少なく流通していなかったとされる延喜通宝が四国などでも多数出土しているということは、この銭の流通状況を見直す際の判断材料ともなりうる。

このほか、「泉貨学」の立場から行われた貨幣の形状・色・重さ等についての分類結果の妥当性を、貨幣素材の理化学的分析結果との比較により実証的に検討していくことという協業研究も可能である。理化学的な分析という点では現在、非破壊分析のように、貨幣を破壊することなく材質・構造に関する情報を引き出すことが可能となっているだけでなく、その精度も高まっている。こうした技術面での進歩を背景として、貨幣の材質そのものを理化学的に研究することが可能となっており、かつて日本銀行金融研究所の協力を得て和同開珎を非破壊分析したことがある。古和同銭と新和同銭の成分を比較したところ、古和同銭と新和同銭との間では銅の含有量に大きな格差があり、しかも前者の成分が純銅に近かったため、これが流通貨幣ではなく母銭であったとみなすこともできる。理化学的分析はまた、貨幣の流通実態のほか、原材料の産地も明らかにしてくれる。

いずれにしても、貨幣の材質に関する分析は、報告論文にあるとおり、近世以降発達した藩札等、紙幣についても適用可能である。私としても、繊維の特色や梳き方の違いにより各藩の藩札に相違があるか、紙の原材料は江戸や大坂の市場で購入したものか否かといった点が検証できないかという問題意識を持っており、今後の研究課題として検討していきたいと考えている。」

1) 和同開珎の外見は必ずしも一様でなく、きめが細かくて薄手で、「開」が隸書体のものと、きめが粗くて厚手で、しかも「開」が隸書体でないものに大別される。泉貨学においては、前者を新和同、後者を古和同と呼んでこれを区別している。そしてまた、従来の説では、古和同の方が新和同に先行して鑄造されたといわれている。

I. 会議の概要

岩橋 勝（松山大学教授、貨幣史専攻）は、導入報告で掲げられた貨幣研究のありうべきアプローチに賛意を表明しつつ、次のとおり個別事例研究を総合したマクロ的な観点からの貨幣研究の整理の必要性を強調した。

「貨幣の流通史を研究する立場からみると、貨幣史研究において最も遅れている分野は報告論文に即していうと『貨幣の動態史あるいは生活史的分析』と『貨幣史の経済理論的分析』の2つである。従来の貨幣史研究では『鑄造（＝発行）史としての貨幣史』については、かなりの研究蓄積があり、貨幣の品位・発行量・流通量・貨幣価値としての相場に関する情報を知ることができる。しかし、鑄造史研究では、ある貨幣がどの地域にどの程度浸透したか、あるいは「定位化」²⁾した貨幣に関する貨幣価値の情報といったもののほとんどが得られないといった限界がある。

それゆえ、貨幣の経済史を研究していくうえでの課題として、次の2つを挙げておきたい。まず第1は貨幣に関するデータの充実である。貨幣に関する需要・供給・相場といったデータを収集し、そうしたデータの分析を通じて経済の動態を捉えたうえで貨幣の流通実態を把握していく必要があると考えられるのである。第2は、江戸時代の経済の動態に合わせ、地方における三貨の流通実態を実証的に分析していくことの重要性である。とくに後者については、私自身、金遣い・銀遣いの経済圏だけでなく東北や西南日本において銭を大口決済についても用いる「銭遣い」経済圏の存在を主張している立場上、その正否を議論するためにも地域レベルで個々に実施されている貨幣の流通実態に関する研究の成果を全体として総括していくことが課題だと考えている。

また、銭貨などの重量のかさばる現金がいかなる方法によって地方へと移送されていたかを解明することや、各地の銭相場の収斂化や季節変動の一致性の背景とそのメカニズムの解明も今後の研究課題となりうるのではないか。」

宮本又郎（大阪大学教授、経済史専攻）は、報告論文で示された貨幣学説史と研究課題を評価した後、江戸時代のマクロ経済分析に焦点を絞って次のような報告を行った。

「江戸時代のマクロ経済分析を行おうとする場合、実体経済動向を示す指標が絶対的に不足しているため、今のところ物価に関するデータが得られる程度に止まっている。このため、マクロ的な分析は物価の中期的変動から実体経済の動向を探るという段階に止まっているのが実情である。

江戸時代は物価変動を基準として、①17世紀の三貨制度の成立による貨幣供給量増加を反映した物価上昇期、②1696～1735年に至る元禄から享保の改鑄時までの物価変動期、③1736～1818年の物価安定期、④1819～1858年の物価上昇期、⑤1859年以降の開港による物価高騰期という5つの時期に分けられる。このなかで興味深いのは、1660年代

2) 三貨制の下、銀貨は秤量銀貨（丁銀・豆板銀）として発行されていたが、その後、銀貨についても計数貨幣とすることが企図され、明和9（1772）年には南鐐二朱銀という定位の計数貨幣が発行された。

までは日本と中国の米価を銀建てで測ると物価変動がほぼ一致しているという点である。当時における日本と中国の銀市場は一体化していたことが、その背景として指摘しうる。

今後の研究課題としては、第1にマネーサプライの時系列データをはじめとするデータの充実、第2に両替商の機能についての分析、第3に市中に退蔵されていた貨幣を御用金というかたちで回収のうえ、市中に還元していく方策のマクロ経済効果の分析、第4に貨幣市場分析の前提となる利子率データの発掘・収集の4つを挙げることができる。

田代和生（慶應義塾大学教授、貿易史専攻）は、今回の報告論文を含め、わが国の貨幣史とりわけ江戸時代の貨幣史の研究においては国際的な視野が欠けていると指摘するとともに、今後そうした観点に留意しつつ貨幣研究を取り進めていくことの重要性を強調した。

「わが国の貨幣史研究をみると、古代の貨幣では中国・朝鮮からの影響が重視されるだけでなく、中世における渡来銭の流通も東アジア交易圏のなかでの動きとして研究されている。しかしながら、江戸時代の幣制研究になると、鎖国ということもあって、わが国の国内問題という観点からの研究に終始している点は否めない。このため、国際的視野に立った貨幣研究を江戸時代初期にも拡げるとともに、ヨーロッパとの比較に加え、東アジア交易圏のなかにわが国の貨幣を位置づける方向での貨幣研究の必要性を強調したい。

このような指摘を行うのも、私自身、江戸時代に朝鮮貿易用に対馬から流出していった人参代往古銀の研究を契機として江戸時代の国際貿易を専門とすることになったからである。一例を挙げると、江戸時代の最初に鑄造された慶長丁銀は純度80%という高品位の秤量銀貨であったがゆえに、鑄造高120万貫のうち100万貫が輸出用の商品として朝鮮・琉球を経由して東アジア交易圏へと流出していったのである。こうした正貨の流出は1630年の鎖国成立後も継続しただけでなく、幕府は灰吹銀³⁾の海外流出阻止を狙いとして、慶長丁銀の輸出を奨励したのであった。銀の海外流出は、慶長丁銀の鑄造に支障を来しただけでなく、国内での正貨の収縮を招来したという点にも留意する必要がある。同様の事態は、正徳・享保銀の10%が海外へ流出した際にも見受けられる。これらの事実、わが国の貨幣を国内貨幣としてだけでなく、東アジアにおける貴金属移動のなかに包摂されたものとして捉える視点が重要であることを示唆しているといえよう。

東アジアとの比較の必要性は、金・銀貨だけでなく、紙幣についても当てはまる。報

3) 16世紀頃までの間、銀の精練については「灰吹き」法が利用されていた。これは灰のなかの石灰に掘出銀に含まれる鉛分を吸収させて銀の純度を高めるという技法であり、この方法に基づき精練された銀塊のことをとくに灰吹銀という。

I. 会議の概要

告論文のなかでは、わが国最初の紙幣である山田羽書の発生はヨーロッパの金匠手形よりも早いと評価されているが、翻って中国を見れば宋においてはすでに10世紀から交子・会子といった大型紙幣が使用されていた事実があり、かかる視点も入れて研究を進めていかなければ、わが国の貨幣のあり方を見失う点があろうと指摘しておきたい。」

山本有造（京都大学教授、経済史専攻）は、報告論文に追加的に要望される二つの視点、すなわち理論的構築と国際的視野について次のように報告した。

「まず第1に、速水が指摘したように、日本貨幣史研究の主要な柱は近世幣制の研究になるであろう。については、近世幣制史のより理論的考案を要求したい。この幣制は鑄貨（三貨）と信用通貨としての紙幣（藩札、両替商手形）からなる二重構造を形成していたが、これを静態的に捉えるだけでなく、そうした構造が形成・展開されたことについての統一的論理を組み立てる必要があろう。私自身は、金・銀減産のもとでの「正貨の節約」という貨幣史上一般に見られる現象と、「幕府集権と地方分権の対抗」という幕藩体制特有の現象が結合しているという論理で説明可能と考えている。

次に後者については、田代が指摘したのと同様に、わが国の幣制も東アジア貨幣圏に包摂されるものとして捉える視点が必要である。たとえば、わが国の中世・近世貨幣史の発展段階を、①宋・明銭を中心とした中国銭貨体制に包摂されていた時代（鎌倉・室町時代まで）、②東アジアでの貿易による中国への銀の大量流入に伴い銅銭が衰退し、東アジア銀圏が成立した時代（15世紀中期以降）、③ヨーロッパにおける金本位制の潮流に組み込まれ国際金本位制度が確立した時代（明治以降）として理解することも可能であろう。」

ロ. 一般討議における意見、コメント

まず最初に、西村閑也（法政大学教授、英国金融史専攻）は、上海の土着金融機関である銭荘が19世紀末から20世紀にかけて、欧州の商業銀行と同様に信用創造を行っていた事実を指摘するとともに、江戸時代における両替商も同様の機能を果たしていたのではないかとこの観点からの研究の必要性を主張した。そしてまた、江戸時代の信用制度、銀行制度の発展過程を研究していくうえでは、「貨幣の節約」方法についても検討する必要がある、その意味で田代や山本が指摘するように東アジアやインドとわが国とを比較するという視点が求められるのではないかとこのコメントがあった。

次いで石井寛治（東京大学教授、近代経済史専攻）からも、次のように江戸時代の信用制度と近代の信用制度との関連を明確にするためにも、幕末期以降の両替商の機能についての研究が必要であるとの指摘があった。すなわち、両替商の機能というと、江戸―大坂間の為替取引および上方での逆為替の取り組みのなかで理解されることが多いが、幕末期になると江戸で逆為替と取り組んでいる事例もみられるなど、江戸においても両替商は相当程度発達していたのではないかと考えられ、こうした江戸を中心とする両替商の発展なくしては、開港後の横浜における対外貿易も成り立たなかったのではな

いか、とコメントした。

また、明治維新以降の信用制度としての為替会社の重要性にも触れ、為替の取り組みをフローベース（この問題に関しては、既に新保によるストックベースの研究成果がある）で研究すれば、江戸時代の信用制度から明治期の国立銀行制度に至るまでの移行を解明するうえでのヒントが得られるのではないかとのコメントもあった。

齊藤壽彦（千葉商科大学教授、日本金融史専攻）は、明治時代のわが国において銀行券がスムーズに流通しえたのは、江戸時代の信用経済がかなり高い発展段階にあったことを背景としたものと理解しうるのではないかという視点を提示した。たとえば英国では19世紀後半以降も金貨という現物が広く流通していたのに対し、わが国では江戸時代に「包金銀」⁴⁾という信用制度がすでに発達していたとし、日本の幣制の研究に際しては、東アジア交易圏だけでなく、欧州との比較研究も重要であると指摘した。

この間、鈴木公雄（慶應義塾大学教授、考古学専攻）は、次のように貨幣がそれぞれの時代・地域においてどのような意味をもっていたかを多面的に捉えることの必要性を強調した。

出土銭の分析では貨幣がそれぞれの地域、時代でどのような意味を持っているかに重点を置いているが、それはそもそも貨幣の性質は多面的なものであり、経済理論や経済史的な観点ですべてが割り切れるものではないからである。貨幣の実態を捉えるうえで問題なのは、貨幣史や歴史といった各分野で貨幣に関する議論が個々に独立したかたちで行われ、相互交流がほとんどみられないほか、古代、中世、近世といった時代区分でもってそれぞれ研究が分断され、歴史的な連続性を重視する観点がみられないという点であると指摘した。そしてこれらの個々バラバラに実施されている研究成果をつなげれば、新たな研究のヒントが得られるのではないかとの可能性を示した。

たとえば、山田羽書についてはなぜこれが伊勢に発生したかという問題については、出土銭を研究する立場からは、東日本に偏在する永楽銭が伊勢国の大湊の入津料として徴収されていたために多く出土したという事実との間に何らかの接点が見いだされる。また出土銭をみると、岩橋の指摘とは異なり、地域間での大量の銭貨移動や売買に関する事実も明らかになっている。いずれにしても、今後、貨幣に関して各所に分散している情報をつなげ意見を交換していく場が必要となろうが、その場合、経済史的な観点からまとめるのではなく、貨幣と人間社会の結びつきという観点から研究を進めていくことが重要である。貨幣博物館での視点は貨幣と人間社会の関係を明らかにすることとして捉え、貨幣史が再構築されることを期待したいとコメントした。

4) 江戸時代においては、金・銀貨幣を一定の金額に取りまとめて和紙に包封し、そのうえに包封者による封印・署名をしたものが信用通貨として、未開封のまま支払手段に利用され、市中を転々流通していた。これを包金銀という。包金銀は、金座・銀座のほか両替商によっても包封され、明治初年まで流通した。

I. 会議の概要

齋藤努（国立歴史民俗博物館助手、文化財科学専攻）は、岡田からの基調報告を敷衍するかたちで、歴史民俗博物館で現在取り進められている皇朝十二銭の非破壊分析に基づく成分分析について紹介した。皇朝十二銭の成分分析については、明治時代に若干の研究がなされただけであり、それを除くとこれまでほとんど行われていないが、今後、こうした研究がさらに進めば、皇朝十二銭の鑄造技術、原材料供給地が判明し、その製造、流通実態についての新たな発見があることが期待されるほか、非破壊分析を通じて古代における銭貨の鑄造技術の変遷もトレースできるのではないか、との可能性を示した。

最後に、蠟山昌一（大阪大学教授、金融論専攻）は、貨幣研究における「情報」の重要性という観点から、貨幣の鑄造、発行に関し、江戸時代の発行者である幕府は金・銀・銭のいずれをどれだけ発行すればよいかという情報をどのようにして得ていたか、また、貨幣が取引手段から発達していつ頃から貯蓄資金を配分するという金融仲介機能を持つようになったのかという視点の必要性を強調した。そしてこれらは貨幣理論分野でも問われている問題であり、石井が指摘したように江戸時代における両替商の研究によって明らかになるのではないかと付け加えた。

(3) 黒田金融研究所長による総括コメント

以上のような討議を踏まえ、黒田金融研究所長が次のような総括コメントを行った。「貨幣を研究することの重要性とその難しさ、奥の深さについて認識を新たにした。

国際的視点の重要性については、議論の中でその問題点と方法論が見えてきたと思われる。今後の研究にはそうした点を十分配慮していきたい。

貨幣を多面的に捉えることもまた重要であると感じた。経済理論だけでなく貨幣の持つ文化的、宗教的側面をも含めたさまざまな要素を総合的に分析することが必要であると思われた。

江戸時代の三貨制度を例にとると、どのような通貨がどのようなシステムで機能していたかということも重要であるが、貨幣の本質に関わる事柄、例えば三貨という多通貨制度の下で日常の貨幣の交換はどのように行われ、記帳整理されたのか、あるいは人々は何をもって自らの保存する富を測っていたのかといった問題を解明していくことがより重要ではないかと思われる。」

以 上

付.参加者リスト（日本銀行関係者を除く）

遠水 融 国際日本文化研究センター名誉教授（パネリスト）
岡田茂弘 国立歴史民族博物館教授（パネリスト）
岩橋 勝 松山大学教授（パネリスト）
宮本又郎 大阪大学教授（パネリスト）
田代和生 慶應義塾大学教授（パネリスト）
山本有造 京都大学教授（パネリスト）

（ラウンドテーブル参加者）

石井寛治 東京大学教授
江口英一 東京国際大学教授
岡部光明 慶應義塾大学教授
貝塚啓明 中央大学教授
齋藤 努 国立歴史民族博物館助手
齊藤壽彦 千葉商科大学教授
桜井信哉 東京大学大学院
鈴木公雄 慶應義塾大学教授
鶴岡実枝子 （元）国文学資料館史料館教授
霧見誠良 法政大学教授
永嶋正春 国立歴史民族博物館教授
西村閑也 法政大学教授
原田一敏 東京国立博物館室長
三上隆三 京都学園大学教授
村田隆三 千葉商科大学非常勤講師
蠟山昌一 大阪大学教授